

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：44511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02695

研究課題名(和文) 同僚性に困難を抱えやすい乳児保育担当者のキャリア形成とバーンアウト

研究課題名(英文) Career development and burnout in childcare workers who tend to experience difficulties establishing collegial relationships with co-workers

研究代表者

永井 久美子(NAGAI, KUMIKO)

神戸女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：20615108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：複数の保育者で保育を行うことが多い3歳未満児保育者(以下、未満児保育者)には、保育者間の連携・協働が求められ、そのありようがバーンアウトにも影響するのではないかと考えられる。未満児保育者間の「連携・協働」について、科目「乳児保育」のテキスト分析、文献調査、施設長(園長)のインタビュー調査や未満児保育者間の保育行為の観察を行った。その結果、未満児保育者の選定において未満児保育経験のある園長は、「関係性の中での理解」と「互恵的な成長」を重要視していることが示された。未満児保育者の保育行為において、「連携・協働」に関する保育行為(情報共有・アイコンタクト・協働援助)が重要な要素として抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未満児保育者の専門性には、一人ひとりの生命や健康の維持、そして個性や偏りをも十分に包含し、その個性を尊重して保育を展開する専門性が強く求められる。このため、保育の理念や目標、方法の共通理解とともに、乳幼児一人ひとりの共通理解のために、常に連携・協働を意識して保育をすすめることが専門性の根本にある。このように、未満児保育者間の「連携・協働」が益々重要になっているものの、この点に焦点を当てた研究は少ない。研究の結果、未満児保育者間の連携・協働について、一定暗黙知を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Childcare workers who care for children younger than three years old (henceforth infant care workers) frequently work with multiple infant care workers. They are required to cooperate and collaborate with each other. It is possible that how they cooperate and collaborate affects infant care workers' burnout. Regarding "cooperation and collaboration" amongst infant care workers, we analyzed textbooks for a course entitled Infant Care, reviewed relevant literature, interviewed directors of infant care facilities, and observed how infant care workers engaged in infant care. The results indicated that directors who have had experience in infant care emphasized "relational understanding" and "mutual growth" in selecting infant care workers. Infant care practices that pertained to "cooperation and collaboration" such as sharing information, making an eye contact, and assisting collaboratively constituted critical aspects of infant care workers' practices.

研究分野：保育学

キーワード：3歳未満児保育 連携・協働 保育行為 同僚性 ソーシャル・キャピタル

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年進展しつつある「保育学」の理論や実践を深め、将来の人格形成の基礎を培う乳児期の保育の質を高めることは、非常に重要な意義がある。保育者のキャリア形成に関する研究は行われてきているが、乳児保育に焦点を当てた研究は少ない。ニーズの高まっている乳児保育を担当する保育者のキャリア形成こそ、研究による知見が求められている。この為、特に乳児保育のキャリア形成に当たっては、キャリアを長期的な視点で捉え、継続的に就業への意欲を促進させる施策を同時に行うことが求められる。また、質の高い保育を提供するための人材供給という視点で、キャリアパスの整備や経験に応じた処遇改善など、長期的なキャリアの在り方を改善する施策の必要性が考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、乳児保育を担当する保育者のキャリア形成における課題とその解決策を明らかにすることを目的とする。具体的には、長期に渡って就業を継続する保育者と困難さのためにバーンアウトした保育者を研究対象として、その変化を細やかに比較分析する。それによって、乳児保育を担当する保育者のキャリア形成、バーンアウトのプロセス及び要因を明らかにすることが可能になる。さらに、乳児保育を担当する保育者を育成する研修プログラムを開発することを目指す。

### 3. 研究の方法

#### (1) 教科目「乳児保育」テキストの分析

乳児保育に関わる保育者間の「連携・協働」に関する内容について、テキストを概読する。そのうえで、保育士養成課程の必修科目である教科目「乳児保育」のテキストの記述内容を分析する。分析に関しては、乳児保育に関わる保育者間の「連携・協働」についてどのように記述されているかに着目し、2018年以降の教科目「乳児保育」のテキストの目次から章、節、項ごとにキーワードを抽出し、分類を試みた。これらのテキストは、主に保育士養成校で用いられるものである。この保育所保育指針改定をふまえた2018年以降の教科目「乳児保育」のテキストを検討することにより、保育士養成校において重視しているであろう、教科目「乳児保育」に関わる保育者間の「連携・協働」への視点について考察を行う。

考察の方法としては、2018年以降の教科目「乳児保育」テキストの目次から、章・節・項に乳児保育に関わる保育者間の「連携・協働」についてどのように記述されているかに着目し、キーワードを抽出し、分類を試みた。川喜田(1967)のKJ法の手続きを参考にして、概念化した。KJ法は、まとめようもない複数多様なデータを、個人の思考だけでなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である。

#### (2) 「連携・協働」に関する文献調査

##### 文献の選択および分類

先ず、保育者間の連携・協働に関する研究動向を探るために、「連携×協働×保育」「保育×チームティーチング」「チーム保育(1語で検索)」「保育士間(1語で検索)」「複数担任制(1語で検索)」「乳児保育×連携」「乳児保育×育児担当制」「乳児保育×専門性」「乳児保育×チーム」「乳児保育×協働」「乳児保育×複数担任制」「乳児保育×チーム保育」「保育×コミュニケーション」をキーワードとして設定した。データベースとしてCinii(国立情報学研究所論文情報ナビゲータ)を使用し、2021年6月までの論文を対象として検索した。

##### 分析結果の分類

本研究においては、近年の研究動向を調査するため、論文を2000年以降に絞ることとした。これらの中には、大学等の紀要論文もあれば、学会の研究発表の発表論文集なども含まれるが、その内、学術論文の形式を取っていないもの(雑誌記事・学会の研究発表の発表論文集等)、「組織間の連携・協働の研究」、「障害児加配や特別支援教育に関する研究」、「保育士 保護者間の連携・協働やコミュニケーションに関する研究」、「保育士 子ども間のコミュニケーションに関する研究」、「保育士養成校在学学生に対するコミュニケーション教育に関する研究」を除外すると、合計14件の分析対象となる学術論文が抽出できた。

14件の先行研究の内容を分類したところ、「複数担任間の連携・協働の現状と課題」「保育者間に求められるコミュニケーションの現状と課題」「組織文化の構築における現状と課題」「対等で尊重し合う関係の構築における現状と課題」の4つの観点に分けることができた。そこで、この4つの観点から文献考察を行った。

#### (3) 園長のインタビュー調査

##### 研究対象

本研究では、自分の乳児保育経験をベースに、乳児保育担当者を選定できる園長が研究対象者として適切であると考えられる。そこで、保育経験が25年以上で、かつ乳児保育経験のある公私立保育所・認定こども園の園長6名を対象として選定した。なお、研究対象者は、筆者らが関

与している園から選定した。

#### インタビューの手続き

インタビューは、感染症対策を鑑みて、直接対面してのインタビューでなくオンラインで実施した。3名のインタビュアーが、ZoomもしくはMicrosoft Teamsを用いて個別に実施した。具体的な手続きとしては、半構造化面接を行い、まず園長として最も近年に担当した年度の園児数・担任の状況・クラス配置について尋ねた。そして、その担任配置について、担任を選定する基準やプロセスについて語ってもらった。さらに、質問項目は、園長の考える乳児保育担当者の適性や選定基準の詳細を明らかにすることとした。一人あたりのインタビューは1時間30分~2時間弱程度で、理論的飽和が確認されるまでサンプル数を増やし、結果的に6名にインタビューを実施した。インタビューを実施した期間は2020年6月から2020年7月までであった。

#### 分析方法の選定

本研究では、保育経験25年以上の園長6名を対象に半構造化インタビューを実施し、乳児保育の経験のある園長が、乳児保育担当者をどのように選定するのか、そのプロセスを明らかにしようと考えた。そこで、はじめにインタビューで得た言語データを文脈に考慮しつつ切片化し、それらをコーディングし概念を抽出した。その結果、いくつかの概念が相互に作用しながら、園長が乳児保育担当者を選定するプロセスが示された。そこで、戈木(2006)がシンボリック相互作用論の影響を受けて「データに基づいて分析を進め、データから概念を抽出し、概念同士の関係づけによって研究領域に密着した理論を生成する研究方法」と述べ、概念同士の関係やその中核に関する意識が高いと位置づけた、ストラウス・コービン版のグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を採用した。

#### 分析の手続き

実際には、まず半構造化インタビューによって言語データを取得し、乳児保育担当者の選定までのプロセスの言語データを文脈ごとに切片化し、その切片化したデータからプロパティ、ディメンションを抽出し、それらの切片に示された単語をつかちて簡潔なラベルを付けた。すべてのラベルを付け終えた後に再確認を行い、それらをもとに概念の抽象度を高くし、似た概念をまとめたり、比較したりすることで、カテゴリーを作成した(オープン・コーディング)。そして、現象ごとにカテゴリーとサブカテゴリーを位置づけ、プロパティとディメンションによって関連づけて現象ごとに構成し、パラダイムを位置付けた(アクシャル・コーディング)。さらに、すべての現象を集めて、カテゴリー同士を関連づけて、それをもとに、ストーリーラインを生成し、そのストーリーラインから理論仮説を構成した(セレクトティブ・コーディング)。このオープン・コーディングとアクシャル・コーディング、セレクトティブ・コーディングを繰り返しながら、理論仮説を精査していった。最後に、理論仮説の妥当性と信頼性を上げるために、抽出されたラベルやカテゴリー、その関連図、ストーリーラインについて共同研究者3名によるカンファレンスを行い、全体を再構成した。

#### (4) 保育者の保育行為の観察

##### 研究対象の選定基準

本研究では研究対象とする保育者を選定するにあたって、3歳未満児クラスを担当した経験が10年以上の保育者とし、すべての保育経験も10年以上のキャリアがある保育者を研究対象とした。3歳未満児クラスを担当する保育者の多様な行為を収集するため、異なる園の保育者4名を選定した。

##### サンプリングの方法

研究対象として選定した保育者が、遊び場面において保育を行う様子を録画した。遊び場面についても、保育者の多様な行為を収集するために保育環境や内容が異なるように意図した。サンプリングした時期は、2021年5月~6月、録画は各園1回とし、撮影時刻はA園では、08:56:31~11:21:11、B園では、08:53:54~11:15:33、C園では、8:59:30~11:20:09、D園では、09:06:22~11:23:01であった。本研究では、保育者の視線や表情を向けた先まで特定できる動画データをサンプリングしようと考え、録画機材はGoPro社製GoPro、360度カメラ(60fps)を用いた。遊びの場面を園の3歳未満児用園庭中央および保育室内において、全体が俯瞰できる箇所を選定し、定点でサンプリングした。時間帯は、遊びが始まってから片付けが始まるまでとした。各園の遊びの時間帯については、Table1に記載し、さらに、各園での遊びの捉え方についても記述した。

##### 分析方法の選定理由

本研究では、日常的な保育実践において、保育者の行為のみを分析対象とするのではなく、同じ場にいる保育者との発話、表情のやりとり、アイコンタクトなど、ノンバーバルな相互作用を含めて、丁寧な分析を行う必要があった。そのため、分析ソフトウェアとして、マックス・プランク研究所(Max Planck Institute)が作成したフリーソフト「EUDICO Linguistic Annotator(以下ELAN 5.7)」を用いたマルチモーダル分析を用いることとした。分析では、GoProによって60fpsで録画した動画データを、ELANでは、30fpsの動画データに変換して、フレームごとにコマ送りをして、保育者の保育中の行為を行動ごとに切片化し、分析を行った。

ELANによるマルチモーダル分析の特徴として、細馬・菊地(2019)は、動画データを見て思いついた注釈を、その動画データの該当箇所に簡単に書くことができ、その部分だけを繰り返し再生して何度も確認できる点を挙げている。そして、さらにそれらの注釈をいくつかの層に分けて書き込むことができる点をメリットとして示している。本研究でも、遊びの場面での保育者の行

為を層として設定し、その層に保育者の行為の注釈を書き出す。そして、映像を何度も繰り返し確認することで、その注釈の妥当性を高めることができると考えた。

#### 分析の手続き

サンプリングした動画データを、ELAN を用いて保育者の行為について、何度も動画データを確認しつつ細やかに切片化した。切片化したデータには、その保育者の行為が持つ意味を注釈として層に入力した。さらに、層に入力された注釈をもとにラベルを付けた。最後に、似たような意味を持つラベル同士をまとめていくことで、小分類を作成し、さらに中分類、大分類を構成した。保育者の行為の切片化、ラベル付け、また、分類の信頼性を高めるために、分析を行った研究者だけでなく、経験年数 24 年の保育者のスーパーバイズを受けた。さらに、経験年数 18 年の保育者に、抽出した切片化した動画データ 600 件を実際に大、中、小分類を用いて分類してもらい、それぞれの一致率を測定した。分類の一致率は、カッパ係数 (kappa coefficient) として示した。分類の一致率 (カッパ係数) については、大分類は  $k=1.000$ 、中分類  $k=.948$ 、小分類  $k=.877$  であり、いずれも高い一致率であった。不一致であった中分類と小分類のデータについては、経験年数 18 年の保育者と著者が共に、再度、分類の基準について確認した上で、最終的にはすべての分類において一致率  $k=1.000$  とした。

## 4. 研究成果

### (1) 教科目「乳児保育」テキストの分析

本研究では、保育士養成科目である「乳児保育」のテキストにおいて、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」がどのように取り扱われているのかを分析し、その傾向を考察することを目的としている。その結果、以下の 7 つのことが指摘されていることが見出された。

子どもへの適切なかかわりのために、種々の情報を速やかに確実に職員間で共有する。

報告・連絡・相談などのルールや、それらを情報共有するための体制づくりが必要である。

子どもが安心して過ごすためには連携が必要である。その中で信頼関係が築かれていく。

複数担任だからこそ、円滑な流れを作る方法や役割分担を検討する必要があり、誰が保育にあたってても一定の質を維持するためにも連携・協働が必要である。

保育観を共有するために、「十分な相互理解と良好なコミュニケーション」や「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場が必要である。

一人ひとり丁寧にかかわるためには、月齢差など個人差が大きいため、様々な情報を把握して、複数の目で確認することが大切である。

より豊かな保育を行うためには、チームプレイを意識し、日頃のコミュニケーションが大切である。

以上のように、「乳児保育」のテキストは、乳児保育者間の「連携・協働」について、情報共有を軸として、保育観の共有等を通してチームプレイで行うことが、一人ひとりへの丁寧なかかわりやより豊かな保育のために必要であることが示唆される。

### (2) 「連携・協働」に関する文献調査

本研究では、文献検索から「保育者間の連携・協働 保育者間のコミュニケーション 組織文化の構築 対等で尊重し合う関係の構築」の現状と課題について研究動向を整理することを目的とした。検索により、14 件の学術論文を抽出し、4 つの観点で分析を行い、以下のよう結果を得た。

柔軟性のある職員関係の構築が大切であり、ソフト面の改善や修正、効果的な対話の必要性が明らかになった。

新人保育者が感じる難しさは「保育者間の連携」であり、新人保育者と同僚のコミュニケーションのあり方が課題である。そのため、保育者間で対話しながら繰り返し子ども理解を重ねていくことが、課題の解消に繋がると明示されている。

保育者が、専門性を向上し続ける職場環境作りには、お互いのエンパワーしていく関係によって成長し「同僚性」を発揮したチーム保育を行うことの意義が指摘されている。

様々な保育の経験を通して、子どもとの触れ合いが、保育の視点を広げ、悩みや不安を共有し、支え合いが生まれていることが明らかにされており、共感的な応答が、支えられている実感に繋がっていると結論付けている。

以上から、保育者間の連携・協働を支える乳児保育担当者間のコミュニケーションについて「対話や語り合い」、その中での「対等な関係や尊重しあう関係」、「同僚性やエンパワーしあう関係」、「対話的な組織文化の構築」の重要性が浮かび上がってきた。

### (3) 園長のインタビュー調査

本研究では、園長がどのような基準で乳児保育担当者を選定しているのか、そのプロセスを明らかにし、選定プロセスにおいて、用いられる概念を抽出し、それらの概念間の相互作用や因果関係を明示することによって、園長が乳児保育担当者間に求めている専門性を探り、検討を加えた。具体的には、乳児保育の経験のある園長に対して半構造化インタビューを行い、乳児保育担当者をどのような基準の下で選定するのか、その選定プロセスにおける園長の意識や意志について言語化した。その言語データを G T A によって分析することにより、乳児保育経験のある園長が「乳児保育担当者の専門性」をどのように捉えているのか暗黙知を可視化することができた。

園長が保育者一人ひとりに対する評価において、保育者個人の力量だけではなく、その保育者と他者とが、どのような関係性を築いているのか、その関係の在り様に着目していることが明

らかにされた。つまり、乳児保育担当者を選定する基盤の段階では、保育者個人が持つスキルや知識ではなく、他者との関係性が重視されることが特徴として示された。

園長が保育者に求める専門的資質として、同僚の保育者と良好な関係性を維持する力や互いを尊重する姿勢、他の保育者と情報共有する力など、関係性に関する資質を重視していることが明らかにされた。

乳児保育経験のある園長が乳児保育担当者を組み合わせる際の意図として、互恵的な成長を期待し、乳児保育担当者の組み合わせを考えていることが示された。園長は、乳児保育担当者の組み合わせについて、単に仲の良い関係性ではなく、お互いを切磋琢磨し、学び合い、互いに支え合い、高め合っていくような協働的な関係性を求めている。

#### (4) 保育者の保育行為の観察

動画データは180分4秒をサンプリングし、そのうち、遊び場面の168分4秒を抽出し、分析を行った。抽出した動画データを分析した結果、切片化したデータは887個、それらを24の小分類にラベル化、さらにラベルをまとめて8つの中分類サブカテゴリに、さらにサブカテゴリを4つの大分類カテゴリに集約した。分析の結果、表1に示したカテゴリ表を得た。

この大分類へとまとめた。保育者間の連携・協働に関する保育の行為としては「情報共有」、「アイコンタクト」、「協働援助」が抽出され、中分類『同僚連携』、大分類『協働的行為』としてまとめることができた。

表1：乳児保育の保育行為カテゴリ表

大分類(4)	中分類(8)	小分類(24)
視覚的保育行為	見る	観察 注目
		把握 確認的把握 俯瞰把握
	見守り	安全確認 遊び展開
移動的保育行為	移動	一緒歩行 俯瞰歩行 注目歩行
協働的保育行為	同僚連携	情報共有 アイコンタクト 協働援助
援助的保育行為	直接援助	手助け 探索 声掛け 身支度支援 トラブル回避 身体接触
		間接援助 モノ提供 片付け 保育者準備
	応答援助	話を聞く 抱っこする イメージ共有

#### (5) 総括と今後の展望

本研究の結果、以下のことが明らかにされた。

乳児保育者のバーンアウトの要因の1つとして、同僚性等が関与している可能性が示唆された。

乳児保育者の選定において乳児保育経験のある園長は、「関係性の中での理解」と「互恵的な成長」を重要視していた。

乳児保育者の保育行為の観察から、「連携・協働」に関する保育行為（情報共有・アイコンタクト・協働援助）が重要な要素として抽出された。

今後、「連携・協働」に焦点を当てた研究を継続し、「連携・協働」を可能にする要素を明らかにして、乳児保育を担当する保育者を育成する研修プログラムを開発することが必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 永井久美子	4. 巻 16
2. 論文標題 保育士間の連携・協働に関する研究動向 乳児保育における保育士間のコミュニケーションに焦点をあてて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪総合保育大学紀要	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井久美子	4. 巻 15
2. 論文標題 乳児保育のテキストにみる保育士間の「連携・協働」に関する分析的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪総合保育大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井久美子・香曾我部琢・渡辺俊太郎	4. 巻 60-1
2. 論文標題 園長が乳児保育担当者を選定する基準とプロセスー乳児保育担当経験のある園長の語りからー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細田淳子・香曾我部琢・上田敏丈	4. 巻 18
2. 論文標題 保育実践における音楽表現の指導の困難性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城教育大学家庭科教育研究	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤本早苗・渡辺俊太郎	4. 巻 24
2. 論文標題 幼児期の社会的スキル、実行機能及び言語能力の関連－男児と女児における比較－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 チャイルドサイエンス	6. 最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋智子・渡辺俊太郎	4. 巻 17
2. 論文標題 構成的グループ・エンカウンターを用いた子育て支援の試み－TEA (複線径路等至性アプローチ) による母親の心情変容の分析－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪総合保育大学紀要	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 永井久美子・香曾我部琢・渡辺俊太郎
2. 発表標題 乳児クラスを担当する保育士の保育行為スタイル－ELANによる保育行為の分析
3. 学会等名 日本保育学会 第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永井久美子・香曾我部琢・渡辺俊太郎
2. 発表標題 園長は乳児保育担当者をどのようにして決めるか？－乳児保育担当者に求められる専門性を探る－
3. 学会等名 日本保育学会 第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柳岡開地・小澤郁美・湯澤正通・香曾我部琢・坪見博之
2. 発表標題 幼児期・児童期の実行機能の可塑性を探る
3. 学会等名 日本発達心理学会 第33回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 上田敏丈・香曾我部琢・飯島典子・伊藤恵里子・上村晶・遠藤綾・萩原はるみ・勝浦眞仁・勝野愛子・永井久美子・永井靖人・中村聖子・藤田清人・水谷亜由美・山本一成・湯澤美紀	4. 発行年 2021年
2. 出版社 株式会社 建帛社	5. 総ページ数 144
3. 書名 コンパス 子ども理解－エピソードから考える理論と援助－	

1. 著者名 安田 裕子、サトウ タツヤ（佐藤 達哉）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 254
3. 書名 T E Aによる対人援助プロセスと分岐の記述	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	香曾我部 琢  (KOSOKABE TAKU)  (00398497)	宮城教育大学・教育学部・准教授   (11302)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	渡辺 俊太郎  (WATANABE SHUNTARO)  (80434877)	大阪総合保育大学・公私立大学の部局等・教授     (34445)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関